

2024年度
第3号

医学教育センターニュース



編集・発行 愛知医科大学医学教育センター ～Dec. 2024～

◆白衣式



2024年10月12日の土曜日、秋晴れの中、たちばなホールで、医学部4年生を対象とした白衣授与式を実施しました。白衣授与式は、医学部生が臨床実習に進むに当たり、白衣を授与して、医師を目指す者としての自覚を促す式典です。CBTや臨床実習前OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）が、昨年度から公的化試験となり、合否判定基準など全国统一基準で実施されました。この試験に合格した学生たちがこの白衣式に臨んでいます。今年は、臨床実習前OSCEが予定していた8月31日、9月1日が台風で中止されたため、再試験の結果が出ないまま白衣式を迎えました。開会にあたり、笠井医学部長から本来出席できるはずの学生が台風の影響で出席できない状況であることを忘れず、またClinical Clerkship Studentとして72週の臨床実習について、多くの経験を積んで今後の医師の道を歩む糧にしてほしいと激励の言葉をいただきました。その後、4年生全員にClinical Clerkship Student証書が送られ、Clinical Clerkship Studentのワッペンを鈴木教授（放射線科）、春日井教授（消化管内科）、神谷教授（糖尿病内科）、早稻田教授（医学教育センター）、伊藤教授（肝胆膵内科）、福井教授（呼吸器外科）の6名から白衣の左肩の袖に貼付していただきました。そのあと、祖父江学長、道勇病院長、井上看護部長、愛知医科大学同窓会から福澤先生より、温かいお言葉をいただきました。また愛知医科大学同窓会からは、長袖白衣の目録を贈呈いただきました。そして、本学研修医の本村理子先生からも、臨床実習する上での心構えなど温かいお言葉をいただきました。最後に、4年生全員が協力して作成した宣誓文を学生代表の林美咲さんが読み上げました。宣誓文は毎年、学生たちが話し合って決め、学生自身がどのような心構えで臨床に臨むのか、その決意が表れています。今年も素晴らしい宣誓文が読み上げられました。4年生全員がこの白衣式で抱いた理想の医師像を目指して、臨床実習を充実したものにしてほしいと思います。

本年度の宣誓文は以下の通りです。

本年度の宣誓文は以下の通りです。

私たちはClinical Clerkship Studentとして医療現場に参加するにあたり、以下のことを誓います。



- 一. すべての人に感謝と思いやりを持って誠実に接します。
- 一. 人権を尊重し、守秘義務を徹底します。
- 一. 患者さんとそのご家族を中心に置いたチーム医療を行います。
- 一. 患者さん、ご家族、住民、社会の利益を追求します。
- 一. 知識・技術だけでなく、人間性においても卓越することを目指します。
- 一. 向上心を持って自己研鑽に励みます。

医学教育センター 講師 河合 聖子

◆チーム医療実習／コミュニケーション演習2

今年も11月15日から22日にかけて、2年生のチーム医療実習とコミュニケーション演習が行われました。

〈チーム医療実習〉

チーム医療実習のねらいは、「プロフェッショナリズム：チーム医療」や「コミュニケーション」を理解するために、チーム医療にその一員として参加し多職種の役割を体験することです。この実習を通して、チーム医療における医師の果たす役割や多職種連携について考察し説明できるようになることを目標としています。

彼らは1年生の時に看護体験（早期体験実習1b：学内）や臨床科見学（同1c：学内・学外）にて、医療現場での医師の仕事を直接的・間接的に学んできました。加えて、多職種連携演習1において看護学部生との多職種連携に関するグループワークを通して、自身の将来の役割や多職種連携について考えてきました。

今回の2年生対象のチーム医療実習では、チーム医療を構成する医師・看護師以外の多様な職種の活動から、さらにチーム医療や多職種連携についての学びを深めます。学生は実習初日に、自分たちが参加させていただく部門・部署について事前学習をします。患者さんに対して、また医師の診療に関して、どのような役割の部門であるのかグループ学習を行い、自身が実習中に学ぶ目標を具体的に考えます。実習期間中には、本学の本院・メディカルセンター・眼科クリニックMiRAIの様々な部署に参加させていただき、実際に見学・体験して学ぶ機会を得ました。職務内容を知るだけでなく、どのようにチームが機能しているのか、そのためにどのような工夫がされているのか、また他職種の視点から学ぶ医師の役割などについて、1年生の時よりもさらに多面的にチーム医療を学びます。私が実習後に学生たちと話していて印象に残ったのは、「互いの専門性を最大限に活かす」という言葉でした。チームが上手く機能して良い結果となった例や、その逆など、いろいろな話を伺ったり目にしたりできたようです。日頃から気兼ねなく相談し合って、患者さんのために良い医療を提供したい、という今の思いを忘れず大切にしてほしいと思います。

〈コミュニケーション演習2〉

コミュニケーション演習2のねらいは、「プロフェッショナリズム」や「コミュニケーション」の基礎を学びチームとして良好な関係を構築するとともに、初対面の患者さんと良好なコミュニケーションをとるためのスキルや自身の課題を明確にすることです。

本演習では、①初対面の方からライフストーリー（非医療情報）を伺う、②症状のある患者さんから症状などを聞き取る（医療面接の入門）、の2つの課題が1日ずつ設定されています。午前中は学生同士でグループワークを行います。どのような内容をどのような流れで伺うのかといった内容面はもちろんのこと、初対面かつ年上の方への言葉遣いや態度、言語的・非言語的なコミュニケーションスキルなどについてグループで話し合い、グループごとに練習を重ねながらブラッシュアップしました。午後は愛知医科大学SP会の皆さまにご協力いただき、1対1での演習です。それぞれの面接後や全体の終了後には模擬患者さんからフィードバックをいただき、グループの学生同士も互いに良い点や改善点などを話し合いました。「たくさん話すこと＝コミュニケーション」ではなく、目的に合致した情報を引き出すこと、それを短時間でスムーズに行うための関係作りなど、一般的なコミュニケーションスキルに加えて医療面接に必要な要素への気づきもありました。この演習は、3年生の症候学／コミュニケーション演習3、4年生の医療面接実習そしてOSCEへとつながります。学年を経るごとにどのような成長をみせてくれるのか、今後がとても楽しみです。

◆2024年度学修支援勉強会について

学修支援は、1年生から4年生まで、留年した学生や、進級したものの学力に不安のある学生を対象とした勉強会です。2024年度後期の学修支援勉強会は、1年生の学生が各自ホワイトボードにまとめてきたものを書いて一生懸命説明し合っている姿が毎回みられていました。また3年生、4年生においては試験が間近なこともあり、担当教科の先生に質問したり、CBT予想問題集を解いたりする姿がみられました。2年生の学生は、毎回参加する学生は一生懸命先生に質問したり、ホワイトボードで説明し合ったりする姿がみられたのですが、無断欠席する学生も今年は多くみられました。

参加意思確認のプロセスを組み込んでいるのですが、初回は参加することが原則のこともあり、やる気に差がみられたのではないかと思います。対象になった学生全員が、学修支援対象者である自覚をもち学修支援に積極的に参加できるような取り組みも今後必要だと思いました。課題提出に関しても、こちらが指示した形で、期限内に提出する学生は少なく、期限に間に合わなかったり、提出の仕方を間違えたりする学生が多くみられました。それについては学修支援の時間内に課題を仕上げ提出するように促していくように今後はしていく予定です。また私たちは、学修支援前後において、日本語版動機づけ尺度（MSLQ: Motivated Strategies for Learning Questionnaire）を用いて学修意欲の変化や、大学精神保健調査票（UPI: University Personality Inventory）を用いて精神健康度を評価しています。

MSLQおよびUPIによるアンケート結果において平均から大きく逸脱した学生は、医学教育センターで個別面談をしています。昨今勉強に悩んでいる学生の理由もさまざまであるため、個別対応が重要になってきています。学生相談室への橋渡しの役割を行いつつ、学生が自学自修の習慣がつくように今後もサポートを続けていきます。毎年快く参加くださる基礎科学、基礎医学、臨床医学の先生方には心より感謝いたします。今後ともよろしく願いいたします。

医学教育センター 講師 河合 聖子

◆第5回医学部FD

9月26日に医学部第5回FDが開催されました。今回は、「令和4年度改訂版医学教育モデル・コア・カリキュラム（コアカリ）」をテーマとして、名古屋大学医学部附属病院 卒後臨床研修・キャリア形成支援センターの近藤猛先生にご講演いただきました。

令和4年度改訂版コアカリのキャッチフレーズは、「未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成」であります。講演の前半では、令和4年度改訂版コアカリの概要をご紹介いただきました。具体的には、これまでの基礎医学、臨床医学、臨床実習という課程にフォーカスしていたコアカリから、「10の資質・能力」にフォーカスしたコアカリに改訂したことなどの説明がありました。「10の資質・能力」のなかで、新たに「総合的に患者・生活者をみる姿勢」「情報・科学技術を活かす能力」の資質・能力が加わったこと、そのほか、科目横断的な科目が増加していること、診療参加型臨床実習のさらなる促進が必要であることなど、改訂版コアカリの特徴もわかりやすくご説明いただきました。講演後半では、近藤先生が開発されたコアカリナビ（<https://core-curriculum.jp/>）を用いて、コアカリ入力の演習もありました。変わりゆく社会に対応した医学教育の重要性を再認識したFDとなりました。



IR室 講師 佐藤 麻紀

◆本学のデータサイエンス教育

本学が2023年度より実施しております「愛知医科大学メディカルデータサイエンス教育プログラム」が、2024年8月27日付けで、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」に認定されました。認定の有効期限は令和11年3月31日です。

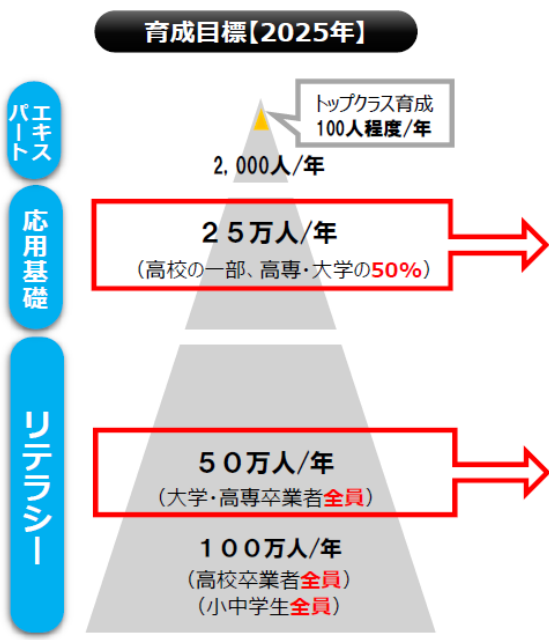
内閣府が「AI戦略2019」を策定し、それを受ける形で2021年度に文部科学省により「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」が制定されました。

数理・データサイエンス・AI教育プログラム（MDASH）認定制度

AI戦略2019

（令和元年6月統合イノベーション戦略推進会議決定）

AIに関連する産業競争力強化や技術開発等についての総合戦略を策定。
この中で2025年までの人材育成目標を設定



制度概要

大学・高等専門学校の数理解・データサイエンス・AI教育に関する正規課程教育のうち、一定の要件を満たした**優れた教育プログラムを政府が認定**し、取り組みを後押し！



【応用基礎レベル】

文理を問わず、自らの専門分野で、数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための**実践的な能力**を育成

2022年度より、応用基礎レベルの認定開始
→ **243件 (166校)** の教育プログラムを認定 (2024年8月時点)
※ 1学年あたりの受講可能な学生数: 約19万人

【リテラシーレベル】

学生の数理・データサイエンス・AIへの**関心を高め、適切に理解し活用する基礎的な能力**を育成

2021年度より、リテラシーレベルの認定開始
→ **494件 (493校)** の教育プログラムを認定 (2024年8月時点)
※ 1学年あたりの受講可能な学生数: 約50万人

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00001.htm

文科省説明資料 2024年11月25日

本学は、医学部と看護学部が連携し教育プログラムを実施するための委員会を設立し、両学部のカリキュラムを調整して今年度の認定に向けて申請し、無事認定を得ることができました。

今回認定された「リテラシーレベル」は、1学年次に開講している「情報学」「統計学」のカリキュラムでカバーできる内容です。今後1段階上の「応用基礎レベル」の認定を受けるためには、実データを扱った研究をされている基礎医学の先生方や診療等でAIを活用されている臨床医学の先生方と連携し、本学ならではの「メディカルデータサイエンス教育」を作り上げていく必要があります。今後も常に改良を重ね、より良い教育の実施を目指してまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

数学 教授（特任） 橋本 貴宏



◆MEDC教育ワークショップ開催



2024年10月26日、本学にて教育ワークショップ『第89回医学教育セミナーとワークショップin愛知医科大学』を開催しました。本ワークショップは、医学教育の共同利用拠点として認可されている岐阜大学の医学教育開発研究センター（MEDC）が主催して行っているもので、年に数回開催

されています。今回、岐阜大学教育センター教授の西城卓也先生よりお声がけ頂き、本学で開催、共催することとなりました。本学で実施するにあたり、本学からワークショップのテーマを4つ採用して頂き、公募されたテーマと併せて、6つのワークショップが実施されました。またランチョンセミナーには、スタンフォード大学の池野文昭をお招きして、「医学部におけるアントレプレナーシップ教育」として講演を頂きました。

当日は、全国から100名近くの医療関係者にご参加頂きました。医師のみならず、看護師、薬剤師、臨床工学士など多くの職種の方に参加して頂きました。学内からも、看護学部、看護部、医師事務など様々職種の方が参加されたのと同時に、ワークショップの企画者・ファシリテーターとして多くの職員にご協力頂きました。ワークショップでは、医療安全や多職種間のコミュニケーションなどがテーマとなり、活発な議論が行われ、参加者からも「勉強になった」「楽しかった」と多くのコメントを頂きました。ランチョンセミナーでは、アメリカシリコンバレーでは、起業を通して、このような人材育成が活発に行われていることが紹介されました。一方、わが国では、失敗を恐れるなどの文化の影響からか、このような人材育成が遅れているということでした。人材育成は社会でも行われますが、教育機関の果たす役割は当然のことながら非常に大切であることを再認識しました。教育に関するインセンティブはどこも苦労しているところではありますが、（例えインセンティブを提示出来なくても）組織がそれを認識して人材育成を大切に



する文化を示すことが、組織が生き残るために必要であると話しされました。教育に携わる関係者には非常に勇気をもらい、時代のニーズに対応出来る人を育てることの大切さを再認識し、明日から頑張ろうという気持ちになった講演でした。

今回、ワークショップを開催するにあたり、MEDCのスタッフはじめ、多くの本学教員や事務職員に協力を頂きました。この場をかりて御礼を申し上げます。

医学教育センター長 早稲田 勝久

